

## 書評：加藤美帆

# 『不登校のポリティクス ―社会統制と国家・学校・家族―』

一橋大学大学院博士後期課程 樋口 くみ子

### 1. 構成と概要

本書の目的は、「不登校」の構築過程と「社会編成の間の動的な関係に着目する」ことで、「学校教育が担っていた社会を構造化する力を対象化し」、「『不登校』という知識の編成過程がそのなかで果たしてきた役割を批判的に読み解くこと」にある（本書, p.63）。

本書は三部構成となっている。

第Ⅰ部「不登校のポリティクスに向けて」では、本書の課題と分析視角が提示される。著者は、先行研究に森田（1991）と朝倉（1995）の二冊を挙げ、それらの研究は「教育改革の正当性を下支えするロジックにも流用可能だった」点で問題があるとし、「不登校に関する議論を有効な社会批判につながる回路をあらためて探る必要がある」と述べる（本書, p.56）[第2章]。この課題を検討するための分析視角として、ムフの「政治」概念、構築主義的観点、ジェンダー論の視角を採用する[第3章]。

第Ⅱ部「就学と欠席を通じた国家の編成」では、長期欠席者に関する公式統計および公式な定義を軸に、呼称と意味づけの変遷が検討される。「長期欠席者」が問題化され、就学督促が行われるなか、出身階層や同和地区出身など、学校文化に親和的でない子ども達が垣間見える一方で、在日コリアンの子ども達は「恩恵」就学という措置をとられていった過程[第4章]、文化的な断絶をもつ子どもの問題がシンボリックな同質性を前提とする「学校ざらい」概念のもとで、非行や親の養育問題へと還元されていった過程[第5章]、「不登校」の定義が拡大し、個人化が進んでいった過程[第6章]が描かれている。

第Ⅲ部「不登校と親密圏のポリティクス」では、教育と福祉の主体としての「家族」に着目し、不登校をめぐる「家族」のイデオロギー的役割の変化と、その機能を検討しようと試みる。朝日新聞

家庭欄の記事分析を通し、1980年代までの「登校拒否＝母親が犯人」という問題化が性別役割規範に規定されていたのに対し、1990年代以降は不登校の語られる文脈が個人の心性を強調する方向に発展し、社会構造上の諸矛盾をも受け容れるようになったと述べる[第7章]。その上で、6名の不登校経験者の母親たちを対象に、「不登校」経験のとらえ方を分析する[第8章]。終章では、今日不登校研究に必要なのは「『不登校』という知が構築されている動的な過程を捉え」、「既存の権力関係を視野に入れそれを対象化すること」であると結論づける（本書, p.208）。

### 2. 本書の意義

評者から見て、本書は以下の二点で意義を持っている。

第一の意義は、第4章において「長期欠席」や就学義務に関する行政の処遇と対比させるかたちで、在日コリアンの子どもに対する就学義務の撤廃を整理し、彼らが周縁化されていく過程を描いた点にある。戦後まもない時期にまでさかのぼり、既に「『長期欠席』が問題化された時点で、あくまで就学義務の課された日本国籍をもつ子どものみの問題ということが暗黙の前提になっていた」（本書, p.97）という指摘は、エスニシティ問題と「不登校（長期欠席）問題」に共通してみられる欠席行為が、異なる文脈で語られるようになった根本的原因を指摘しうるものであったと言える。

本書の第二の意義は、第Ⅲ部にて「不登校」をめぐる言説に潜在化する性別役割規範を描き出した点にある。管見の限り、これまでの教育社会学的研究は、不登校現象をジェンダーの視点から分析することがなく、本書はジェンダーの視角を不登校研究にも応用できることを示した先駆的研究に位置づけられよう。

### 3. 残された課題

上述のように意義が認められる一方で、疑問点もないわけではない。ここでは三点、課題を述べる。

第一に、不登校に関する先行研究への目配りの不十分さである。不登校研究が「心理学や精神医学によるものや直接的な学校復帰を目的としたものが多数を占めてきた」（本書、p.209）といった記述が散見されるが、社会学的な不登校研究は1990年代以降、増加の道を辿った。2000年代初頭には『教育社会学研究』で特集も生まれ、心理主義化する不登校研究に教育社会学的研究を導入することの重要性も訴えられた（加野 2001）。不登校のリーディングスが発行される程の蓄積を経た今日（伊藤編 2007）、心理学的研究と一線を画す研究は決して目新しいものではない。

また、先行研究を整理した第2章で、著者は森田（1991）と朝倉（1995）の二冊のみを取り上げている。しかし、朝倉の課題として著者が指摘する、「『学校』自体がもつ社会の不平等を再生産するメカニズム」（本書、p.65）に関しては、既に、生活困難層の子どもたちが学校教育から不登校として周縁化されていく様子を論じた研究（久富 1993）や、長期欠席行為の背景にある漁村の再生産戦略を描いた研究（福島 1998）などの蓄積がある。また、戦後の長期欠席から「不登校」に至るまでの言説の構築過程を描いた研究（工藤 1994, 1995）もある。とりわけ久富（1993）と工藤（1994, 1995）は、先述のリーディングスの「基本文献」リストにも掲載されているが（伊藤編 2007）、本書では全く言及がない。本書の知見のオリジナリティを際立たせるためにも、当該分野における本書の位置づけを示しておくべきだろう。

第二の疑問は、第7章にて、朝日新聞家庭欄の記事を「対抗的公共圏」として位置づけ、中心的に分析したことの妥当性にある。対象を一紙の家庭欄に限定し、例えば10年間に6件の記事が掲載されたことをもって「父母役割の強化」にもとづく登校拒否問題化の過程を主張したり（本書、p.176）、母親同士の結束を呼びかけるわずか1件の投書をもって「インパクトの大きさ」を主張したりするが（本書、p.177）、やや強引な解釈に見える。

問題はそれだけではない。著者は、新聞の家庭欄が、社会面や政治面のような主流の支配的言説からは距離を置く、「対抗的公共圏」（齋藤 2000）としての特質をもつと主張する（本書、p.170）。しかし、齋藤の言う「対抗的公共圏」とは、「自分達の『ニーズ』に外から与えられた解釈を問題化し、自分たちに貼り付けられた『アイデンティティ』なるものを疑問に付し、『異常である』『劣っている』『遅れている』といった仕方で貶められてきた自分達の生の在り方を肯定的なものとして捉え返し……という再解釈・再定義の実践が試みられる」（齋藤 2000, pp.14-15）空間である。この概念を用いるならば、記者によって一方的に「関心事」を選別される場よりも、むしろミニコミ誌や親の会の集いの実践といった、共通の関心事のもとで繋がる空間のほうが「対抗的公共圏」として妥当ではないか。ミニコミ誌と新聞記事のせめぎあいを見るほうが、「『不登校』という知が構築されている動的な過程」（本書、p.208）もより明確に描けたであろう。それでもあえて、メディアの言説上での「対抗的公共圏」にこだわるのであれば、政治面・社会面と、家庭面とを厳密に比較する、という構成にすべきではなかったか。著者も多少の比較検討は行っているが、「家庭欄」に見られた記事内容のみを政治面・社会面で検証する程度に留まっており、政治面・社会面全体の「支配的言説」の姿は部分的にしか浮かび上がらず、不十分な分析となっているのが残念である。

第三に、第8章で不登校をめぐる「家族」のイデオロギー的な役割を検討するなかで、母親のみを対象としたために、分析が偏ってしまった感が否めない。それというのも、著者は第7章の朝日新聞家庭欄の分析で、父親に関する言説が浮上したこと、加えて1990年代以降の父親の在り方を問う記事が、それまでの「父親の担うべき役割」という観点から、「父親」と親密さを基盤にした関係の再構築を志向するよう変化した点を明らかにしている（本書、p.179）。母親だけでなく、父親、兄弟姉妹等を含めた「家族」のイデオロギー的な役割はいかなるものだったか。本書が提示したジェンダーの視点が鋭利であるがゆえに、かえって物足りなさを感じてしまった。

以上、先行研究の位置づけ、「対抗的公共圏」に

関する事例の妥当性、「家族」に関する分析において限界はあるものの、本書は国家・学校・家族という広範囲にわたり、不登校をめぐる社会統制とポリティクスを捉えようとした意欲作である。

### 参考文献

- 朝倉景樹, 1995, 『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社.  
福島裕敏, 1998, 「1950年代『長欠』論の再構成——〈家族-学校〉関係の視点から」『＜教育と社会＞研究』第8号, pp.43-51.  
伊藤茂樹編, 2007, 『リーディングス 日本の教育と社会 8 いじめ・不登校』日本図書センター.  
加野芳正, 2001, 「不登校問題の社会学に向けて」『教育社会学研究』第68集, pp.5-23.  
工藤宏司, 1994, 「『不登校』の社会的構築——モノグラフの試み(上)」『大阪教育大学教育実践研究』第3号, pp.79-94.  
———, 1995, 「『不登校』の社会的構築——モノグラフの試み(下)」『大阪教育大学教育実践研究』第4号, pp.85-102.  
久富善之, 1993, 『豊かさの底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』青木書店.  
森田洋司, 1991, 『『不登校』現象の社会学』学文社.  
齋藤純一, 2000, 『公共性』岩波書店.

### [付記]

本書評は、＜教育と社会＞研究会2012年12月例会の報告をもとに執筆した。「残された課題」のうち、第一の疑問には著者のリプライを得ている。第二の疑問は本書評執筆の際に新たに追加し、第三の疑問は例会時のフロアの質疑応答を参考にした。